

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 天戸祐輝

挿絵 ga015

第一章 麗しき聖姫くノ一

第二章 襲われし美肢体

第三章 穢れる誘惑

第四章 淫獄に降る聖姫

第五章 恥辱の婚姻

エピローグ

006

022

057

112

180

249

登場人物紹介

Characters



さあや
紗綾

人外に支配されている魅幌国の正統な後継者。忍びの鍛練を積んでおり、様々な術を扱うことができる。

かや
華耶

羅丞に仕えるくノ一。卑劣な手を好んで使うことから“蜘蛛の華耶”と呼ばれている。

ゆいは
百合葉

紗綾の義理の姉。羅丞が魅幌国に攻め入って以来、行方不明。

らしょう
羅丞

魅幌国を支配している人外たちの首領。

えたい
画帯

紗綾の父を裏切り羅丞に寝返った醜悪な大名。

ひの
緋乃

紗綾に忍びの術を教えた女性で、姉的な存在でもある。

(この程度の奇襲、わたくしには通用いたしませんわ。蒼幌幻術・幻身鏡っ！)

上を見上げ、黒い瞳に向かつてくる蜂貌を捉えた彼女は、残像を残しながら素早く動き、蟲人と下鬼の両方に幻を見せようと印を結ぶ。

「今更間に合うカ、この雌犬めガ！」

「くあああああ——っ！」

だが間に合わなかった。残像に襲い掛かると思っていた蟲人が急に降下角度を変え、逃げようとした紗綾に襲い掛かってきたのだ。細い肢体は一瞬にして蜂人の四本ある両手で後ろから抱き締められるように拘束され、節くれだった蟲腕が細い腰と胸元に絡まり、その先に付いた手が女忍装束越しに二つの肉果実を揉み掴んでいる。

「ヒヤヒヤ、柔らかい胸ダァ……」

「はくっ……、汚い手で触れないで……」

涎を垂らし、両胸を揉む蜂人を睨み付ける。衣服越しに揉まれる両胸には指が喰い込み、装束の胸合わせから覗ける峰乳の深い谷間が汗で輝いた。

「お前はもう俺たちの穴ダ、手だけじゃなく、もっと汚いモノまで受け入れるんだぜ……
ジヨロ……」

肢体を後ろから拘束した蜂人が首筋に舌を這わし、唾液を肌に塗しながら動けなくなつた下鬼の元に歩いていく。

「いい提案だっただろう、俺が残って、逃げたお前が上空から襲うという案は」

「ヒヤヒヤ、まったくだぜ。これで珍しいくノ一を俺たちの雌にできるんだからナ」

下鬼の元まで近付いた蜂人は、紗綾が動けなくする為に突き刺した針を引き抜いた。

「さて、締めりがいいと云われるくノ一が、どんな声で鳴くのか楽しみだ」

身体の自由を取り戻した下鬼は犯していた町娘を離すと、淫液まみれの肉槍を勃起させたまま聖姫の前に立ち、肢体を包んでいたくノ一装束の合わせ目に手を向かわせてくる。

「勝手に触らないで、下賤な輩に触られるくらいなら、この場で舌を噛んで……」

「いいぜ舌を噛んでも。そうしたら城下町で裸にして晒し、数人の人外たちを集めて犯しながら喰ってやる」

「くっ……」

下鬼の言葉に何もできなくなってしまふ。その美貌は俯いて唇を震わせ、絶望的な状況に青ざめていく。

「大人しくなったところで、その大きな胸を見せて貰おうか……」

「やめてっ、お前たちのような輩に見せるなど。くううう……」

下鬼の手によってくノ一装束の胸合わせが左右にはだけさせられ、手毬ほどある大きな肉果実が二体の人外の眼に晒されていく。透き通るほど色が白く、釣鐘型に膨らんだ峰乳は重力に逆らって鶉色とぎの頂をツンツと上に向け、可愛らしくフルフルと震えている。

しかし、本来あるべき聖姫としての証が、彼女の右胸にはない。

「ケケッ、処女みたいに綺麗な乳首の色だぜ！」

「……っ」

双美乳を見られた羞恥に貌を紅く染めて左右に振り、長いポニーテールを揺らす美少女。布から剥き出された両胸は汗ばみ、彼女の呼吸に合わせて大きく揺れた。

「ヒヤヒヤ、色は処女みたいでモ、こいつは淫乱なくノ一ダ。こうしたらすぐに声をあげテ、我慢できなくなる身体をしてやがるはずだぜ」

「ふあ!? んうっ……ああ……」

蟲人が姫の背後から腕を回し、露になった肉果実を下から包むように揉み始めた。紅く染まった美貌を後ろに向け黒瞳で睨み付けるも、相手はもっと恥辱を与えてやるとばかりに柔らかな肉房に指を喰い込ませ、小さく薄い乳輪の中で鎮座する乳芽を尖らせていく。

「はうっ……んう……」

貌を擧め、桜唇を噛み締めながら恥辱に耐える。だが美しい肢体を手に入れた人外は、更に激しく柔房を揉みしだき、釣鐘型の美乳が淫猥に歪む姿を楽しんだ。

「ケケ……、乳首が尖ってきやがった。そんなに吸って欲しいのか? チャップ！」

「くうんんんんッっ！」

下鬼が裂けた口を右胸へと近付け、尖り始めた薄ピンクの頂に吸い付いた。

姫は声を出すまいと唇を強く噛み締めて瞳を閉じ、顎を仰げ反らせて胸頂を貪られた刺激に耐える。だがその刺激が強いのだろう。長い睫毛が扇情的に震え、陵辱者たちを更に興奮させてしまった。

「乳首を吸われただけで随分と反応するじゃないか、ならばもっと楽しませてやるよ！
ジュロ……チュパッ、チュルルル……」

「はううっ！ はくっ……嫌……つつっ……つつ！」

艶めかしい吐息を洩らし、蜂人に拘束された肢体を震えさせながら恥辱に耐える美少女。下鬼に乳芽を貪られる峰乳は大きく揺れ、全身の肌からは急激に汗が滲み出していく。薄い色の乳輪はプックリと膨らみ、もっと吸って欲しいかのように下鬼の唇に触れた。

「はうっ……はあはあ……んくっ……くはああああああつ！」

息を喘がせ、潤ませ始めた瞳で下鬼を睨み付ける。だがそんな視線で人外どもが彼女の肢体を離すはずはない。美しい肉果実にはより強く蜂人の指が喰い込み、貪られる乳芽には鬼特有の牙が立てられてしまう。

「ケケ……早く素直になって俺たちに奉仕しろ、淫乱なくノ一め」

可憐な色の乳芽と牙の間に唾液の橋をかけながら右胸から離れ、鬼貌に醜悪な笑みを浮かべる人外。彼は自分の口で尖り勃ち、乳輪まで膨らました美乳を眼で楽しむと貌を下に向け、短い裾で隠された紗綾の下半身を見つめてきた。

「こんなにいい胸をしてやがるんだ、こつちも相当具合のいい蜜壺を持っているらう」
「……っ!？」

人とは違う筋肉質な手が薄紫のニーソックスに包まれた内太腿に触れ、円を描くように肌を撫でながら装束の裾の中へと近付いてくる。

クチュ……

「くふううううううううううう——っ!」

人外の手がくノ一装束の裾に忍び込み、左右に刻まれたスリットを広げた瞬間。桜唇から切羽詰まったような短い悲鳴が洩れ、彼女の股部から濡れた淫音が奏でられた。

「ケケ……、このくノ一、禪どころか下穿きも着けてねえぜ……」

一瞬怪訝な表情を見せた下鬼が貌をいやらしく歪め、姫の貌を下から覗き込んできた。その人外は彼女の羞恥に染まった美貌を見ながら淫部に這わせた手を動かし、グニグニユと柔らかな女肉を掻き分けながら、濡れた秘孔に指先を擦り付けていく。

「くうあああつ! やめ……はくつ……ううっ!」

艶めかしい吐息を荒げ、聖姫は肢体を半痙攣させながら顎を仰げ反らせ空を見上げた。人外の手で淫部をまさぐられ、秘孔まで触られた屈辱に彼女の全身には鳥肌が立ち、潤んだ黒瞳の端に涙が溜まっていく。

「はあはあはあ……ふはっ……どうにかなってしまいそうですわ……」

紅葉した美貌が震え、涙ぐんだ瞳が淫蕩な輝きを見せていく。二体の人外によって翻られる身体は、まるで肉悦を求めるかのようにくねり、ニーソックスに包まれた太腿が小刻みに震えている。

「ケケ……、そんなに潤んだ貌しやがって、もう我慢ができなくなっちゃったのか？」

下卑た笑みで話しかけてくる下鬼に、彼女は何も答えず俯く。

「ヒヤヒヤ！ もうこの雌くノ一は抵抗しそうにないぜ」

下品な笑いをした蜂人が、楽しそうに紗綾の前方へと奇妙な身体を動かし、今度は真正面から二つの肉果実を揉んできた。瞬間的に両手で胸を隠そうとした姫だが、蟲人はそれを許さないと残っていた二本の手で細い手首を掴む。

「こんな綺麗な胸は見た事がない。しばらくはこの女で楽しめそうダ……チャプ……」

「ひゃんんんんんんっ！ 囓んじや……ダメ……」

昆虫独特の硬質な口で左乳芽を貪られた姫は、その全身を震わせながら甘い声を洩らし、凶暴な蟲口から頂を離そうと胸を左右に振り乱した。

「我慢してい口、すぐにこの痛みが最高の疼きに変わる」

乳芽から蟲口を離さず、蟲人独特のなまり口調で話しかけてくる。両峰乳を揉む手には更に力が込められ、二つの肉房が潰れてしまいそうほど歪められてしまう。

「……んう……やだ……あつはあああああああ！」

胸の痛みを耐えている最中、牙を立てられた左乳芽の刺激に全身が突っ張り、桜唇から肉悦に感じる声が奏でられ始めた。濡れた音を奏でる秘孔からは女蜜が溢れ出し、白く瑞々しい太腿を伝い薄紫のニーソックスの色を濃く変えていく。

「もう我慢できないのか？ ケケ……、くノ一といっても所詮は女だな」

淫部を颯ついていた下鬼が姫くノ一の前面を蜂人に譲るように退き、今度は背後からくノ一装束の裾を捲り上げ、魅力的な桃の形に膨らんだ美尻と、その下にある淫部を邪な眼で見つめてくる。

「本当に極上の身体だけ……、尻も形よく膨らみ、蜜に濡れた肉ピラも形が崩れてない薄紅色をしてやがる」

「ああ……見ないで……下賤な者に見られるなんて……」

背後からお尻を見られ、淫部の形や色まで言われた聖姫は肉悦を感じながらも艶めかしい声で応え、恥ずべき部分を見せまいと桃尻を左右に振る。しかし、視線を強く感じてしまふ淫部は、その刺激に応えるように徐々に淫唇を左右に広げ、吐息をするように小さく開閉を繰り返す薄紅色の秘孔を披露していく。貞操筋を浮き出させた内太腿には愛液の糸が少しずつ増え、ニーソックスの膝下までその色を濃く変えてしまった。

「くノ一が淫乱だつてのは本当だな、もう漏らしたように女蜜を垂らしてやがる！」

パシッ！

「くあうっ！」

言葉で紗綾を辱めた下鬼が女淫を眺めながら桃尻を叩き、彼女の桜唇から短い悲鳴を奏であげさせた。だが聖姫は抵抗しない。それどころか、叩かれた瞬間に嬉しそうな笑みを浮かべ、秘孔から新たな愛液をコプツと溢れさせてしまったのだ。

「ケケケケケ！ 叩かれて蜜垂らすなんて、娼婦よりも淫乱な身体してやがるぜ！ もう我慢できねえ、膣う舐めてからぶち込んでやろうと思っていたが、今すぐ俺のモノで串刺しにしてやるぜ」

「……そんな穢らわしいモノなんかで……嫌……」

下鬼の言葉に戦おのき、二体の人外から逃れようと身体を揺さ振る。だが後ろから秘孔に近付いてくる雄の猛り熱に身体が硬直し、諦めに似た声が唇から洩れてしまう。

「ケケ……すぐに気持ちよくして、俺らの肉奴隷に調教してやるぜ」

クチャ……

「はう！ い……嫌ですわ……そんなモノを挿入しないで……」

頭を振り、長く美しい栗色のポニーテールの毛先を振り乱しながら桃尻を左右に振り、小さな秘孔に触れた人外の肉槍を拒む美少女姫。だが下鬼は彼女の入り口に突き付けた切っ先を離す事はなく、一回り太い亀頭でグリグリと小さな肉輪を拡張し始めた。

「嫌……嫌ですわこんな……こんな人外に穢されるなど……くはああああっ!？」

ズニユッ……

「いやあああつ！ くはつ、そんなの挿れないで……そんなのダメえええ！」

濡れた音を鳴らして小さな秘孔を広げた亀頭に紗綾は悲鳴をあげ、蟲人に食られていた胸頂を口腔から引き抜いた。長いポニーテールは靡き乱れ、未だ蜂人の手で揉まれている二つの肉果実が、人外の彼らを楽しませるかのよう上下に揺れる。

「ここでやめる奴が何処にいやがるつ、一気に突き刺し、くノ一の雌壺の具合を楽しませて貰うぜ……うおりゃ！」

「くふうううつ！ そんなの嫌です……わ……イヤあああああ——ッ！」

ジュプッ……ジュニユジュリユジュプ……ジュプウウウウウウウウッ！

小さな秘孔を歪ませ、醜い下鬼の肉槍が彼女の膣内を一気に貫いた。辺りには濡れた女肉に雄槍が突き刺さった音が響き渡り、姫くノ一の悲しい叫びが森に轟き渡っていく。

「くはッ！ はあはあはあ……ひいふううううううッ！」

貫かれた心地よさに息を荒げ、聖姫は紅く染まった美貌を左右に振り唇から唾液を零した。肢体は見て取れるほど肌を騒がせ、秘孔への挿入で抵抗力を失った上半身がガクリと前方向に倒れ込む。

「ケケケ……くノ一の雌壺は噂通り最高の穴だあ、狭い癖に嬖がネトネトと絡まってきて……おうつ！ すぐにでも射精しちまいそうだぜ……」

ズチャ……ズニュ……ズリュズチャ……

「はくッ！ くッ……ひゃふッ……くうふううんんッ！」

挿入されたシヨックで上半身を前方向へ九十度倒した美少女の姿に、興奮を高めた下鬼が立ちバックの体位で腰を前後させ、鬼独特の力強さで膣内を陵辱し始めた。肉体の接合部からは淫らかな水音が鳴り響き、溢れ出した女蜜が雫となって地面に落ちていく。

「ヒャヒャ、もう腕の力もなくなつて、ただの雌になりやがッタ」

両腕を掴み、姫くノ一の上半身を拘束していた蜂人が長手袋に包まれた両腕を放した。聖姫の両腕は肉体を貫かれる衝撃に耐えようと、すがるように目の前に居た蟲人の身体にしがみ付いてしまう。

「いきなり俺にしがみ付きやがッテ、雌穴を貫かれただけでは物足りないのか？」

蟲人の言葉に紗綾は瞳を下げた。彼女がしがみ付いた場所は蜂人の胴の部分である。ニヤけた蟲貌から恐る恐る下げたその視線の先には、胴体と尻尾の間の異常に括れた部分から、腐ったバナナのような黒ベニスが反り勃っていた。

「……ッ！」

あまりに気持ち悪いモノから美貌を背け、一刻も早く蟲人の腰から手を離そうとする。だが蜂人がそれを許さない。彼女が離れようとすると、すかさずポニーテールを揺らす栗色の頭を両手で押さえ、欲望の切っ先を可憐な桜唇に向かわせてきた。

「しゃぶつて貰うゾ、ヒヤヒヤヒヤ……くノ一の舌技を味わわせてもらウ」

「うぶッ……嫌……ですわ……」

貌を振り、生温かい先液を塗す亀頭から唇を離そうとする。だが醜い切っ先は離れはせず、それどころか徐々に桜唇を割り、口腔に先液を染み込ませてくる。

「……ぷっ……むふ……こんな汚らわしいモノに唇まで奪われるなど……」

「そう言わず、奴の気持ちよくさせてやれよっ！」

「んぶうッ!? むふッ……ンむうううううううッ！」

チュプア……チュプチュプチュプウウウウウウウッ!

拒んだ瞬間だった。秘孔を貫く下鬼が一際強く腰を桃尻に叩き付け、姫の肢体を強引に前へと動かした。口淫を拒んでいた唇は、前後からの力強い腰突きで割り開かされ、醜く臭い蟲人の淫根が喉奥にまで突き刺さってきた。

「うぶうえッ! んぶッ……んチュプッ!」

桜唇を淫らに歪めさせられ、口腔に突き込まれた蟲人の淫根に呻く紗綾。唇は淫根を啜え込み、肉体の上下から淫らな水音を奏でてしまう。

「ヒヤヒヤ! 具合のいい喉だぜ、先つぽが狭い喉に擦れテ、今にも出しちまいそうダア」
「ケケ、喉を突かれた途端、更に雌壺の具合もよくなりやがって……、おうっ、俺様も出しちまいそうだあ……」



「ンうふううッ！ んぷ……ンぐッ……もふイヤ……」

淫猥に歪む桜唇と秘孔から体液を垂らし、姫くノ一は上下からの肉突きに激しく肢体を揺す振られながら呻き始めた。立ちバックの体位のまま唇まで犯される激しい陵辱に、下を向いても形の崩れない峰乳が大きく揺れ、可憐な乳芽から汗が飛び散っていく。

「ンぶうはッ！ はふッ……もふらめ……わたくひもう……らめ……んッ！」

上下から激しい肉突きを受け、人外の者に体内を陵辱された姫の肉体が発情し始めた。淫根が入りする度に秘孔からは激しく蜜が吹き出し、唇からは唾液が糸を引いて滴っていく。尖り勃った乳芽は弾けるほど膨れ、峰乳が上下の口を貫かれる衝撃で揺れる。

「ンはッ！ チュプ……んッ……んん……はうッ……もふ身体が限界でふわ……」

人外のペニスを啜える唇からくぐもった声を洩らし、潤んだ瞳を震わせながら絶頂に達しそうな事を伝える。両腕は乳悦を求めて自ら二つの肉果実に指を喰い込ませ、人外に見せるように揉み始めた。

ジュプッ！ ジュリュッ！ チュパッ！ ジュボッ！ チュパジュプッ！

「ケケケケケ！ この雌くノ一もう限界のようだぜ！」

「ヒヤヒヤヒヤ！ だったら俺も出してやる、くノ一の喉に蟲人の精液の味を教え、永遠に人外の娼婦にして犯しまくってやる！」

絶頂に近づく紗綾と共に、秘孔を突く下鬼と喉を陵辱する蜂人の腰つきが速度を増して

いく。二本の肉交を受ける唇からは唾液と愛液が滴るように溢れ、切っ先に擦られる喉と膣の粘膜が痙攣を始めた。肢体は見て取れるほど全身の肌を騒がせ、大量の汗がくノ一装束に染み込み峰乳の頂から飛び散っていく。

「いくぞ……ケケ、出してやる、くノ一の雌壺にぶちまけてやるぜええええええっ！」
「俺も出ス、この雌くノ一に蟲人の精液を飲ませてやる！ くおおおおおっ！」

どびゆるるるッ！ ビュルプ……ドバびゆるビュブルルるるッツツ！

「んはああああああッ！ 熱いッ！ はうっ……わたくしもう……はくッ！ はくうう
うううううううううう——ッ！」

鈍い粘音を鳴らし、喉と膣内に進った陵辱液に紗綾は肢体を痙攣させ、肉槍を啜えた桜唇から絶頂を叫んだ。肢体は壊れたおもちゃのようにガクガクと痙攣を繰り返し、肉幹を啜えた秘孔から大量の女蜜が噴出して森の地面に泥を作り出していく。

「くはああああッ！ はふッ……んあ……はあはあはあ……ッ！ ツッ……」

絶頂に肢体を痙攣させ、紗綾は涙を流しながら荒い呼吸を繰り返した。人外の肉槍が突き刺さった桜唇や秘孔からは白濁が溢れ出し、粘り糸を引かせながら森の地面に滴り、白い泥を作った。

「このくノ一、俺らの精液注がれて達しやがった」

下鬼が秘孔から己の淫根を引き抜き、ポツカリと空いた膣口から陵辱液が溢れ出す様子

を見ながら笑みを零した。蜂人も同じように桜唇から雄槍を引き抜き、呆けたまま唾液交じりの雄液を垂らす美貌に笑みを作っている。

「さて、こんどは俺が女孔を犯す番だ……」

下鬼と蜂人が場所を入れ替え、陵辱液と聖姫の体液が絡まった肉槍を穢れた秘孔と桜唇に近付けてくる。

「今度は俺のモノをしゃぶってくれよ、淫乱くノ一」

「はひ……んちゅプううッ！」

姫忍はそう返事をする、雄液の絡まった舌を下鬼の淫根に這わせ、桜唇の中に招き入れた。同時に秘孔には蟲人の雄槍が挿入され、再び上下の唇で淫らな挿入音を奏でさせられてしまう。

「……まったく、どうして人外には下劣で醜い者しかないの……っ！」

姫くノ一の陵辱が行われている傍で、優しげな、それでいて何処か怒りの込められた声が奏でられた。その美声に目を向けてみれば、薄紫と藍色のくノ一装束を独特に着こなした紗綾が地面に膝を付け、凜々しくも怒りを帯びた瞳に二体の人外を映している。その姿には穢れた場所どころか、衣服の乱れ一つない。

彼女の横の地面には陵辱されていた町娘が意識なく横たわり、秘孔から大量の白濁液を溢れ返している。聖姫はその町娘のお腹を強く押しつけて口を下に向けさせ、精液で息が詰ま

らないように吐かせていたのだ。

姫くノ一が怒りを堪えた瞳を向けている先に目を戻せば、そこには激しく腰を振り、己の欲望を満たそうとしている下鬼と蜂人が居る。しかし、彼らが美少女くノ一だと思っ
て犯している相手は、当然ながら紗綾ではない。

彼らが快楽を貪っている相手。それは地上に姿を現し、くの字に折れ曲がった大木の太根だった。人外たちはその太根を両手で掴み、そこにある節穴や窪みを秘孔や唇だと思
い込み、肉槍を押し付け射精を行っているだけなのだ。

蜂人に捕まる前に仕掛けた幻術が成功し、紗綾は二体の人外に対して自分を捕まえた
と思わせているのだ。

「いったい……幻覚のわたくし相手に、どんなおぞましい事をしているのっ！」

美貌を真つ赤にさせた紗綾は藍色の鞘より風断を抜き放ち、真横に振り薙いで真空の刃
を発生させた。幻覚とはいえ、二体の人外が陵辱しているのは彼女である。まだ穢れを知
らぬ姫くノ一には、それを我慢する事などできるはずもない。

聖刀が発生させた真空の刃は、甲高い風切り音を鳴らしながら間拔けな二体の人外へと
向かい、木の根を相手に腰を振る肉体を斬り裂いた。

ドサッ！

上半身と下半身を分断された下鬼と蜂人は、自分たちが何をされたのかも気付く事なく

地面へと倒れ、肉体を溶解させながら森の地面に染み込んでいく。

「まったく……、下穿きも着けていないとか言ってたけど、わたくしはそんなはしたない真似はしないわよっ！」

下鬼が幻覚の自分相手に言っていた言葉を思い出し、怒ったように一人でぶつぶつと文句を言う彼女は、人外を葬った聖刀を鞘へと戻すと、横で倒れている町娘を助け起こそうと腕を伸ばした。

「お待ちください、紗綾様！」

叫ぶような声で姫くノ一の行動を留め、スッと彼女の元に現れる緋乃。他の場所で幾多の人外を倒したのであろう彼女はよほど急いでいたのだろう。かなり息を乱している。

「人外の穢れを紗綾様に触らせる訳にはまいりません」

「だからって、緋乃たちに汚い事を押し付けて、わたくしだけ綺麗でいる訳には……」

姫に穢れを触らせまいと町娘との間に立ち、紗綾の行動を制す。その行動を良しとしないう聖姫が町娘に触れようとすると、すかさず彼女の部下である覆面の女忍が現れ、白濁まみれの町娘を抱きかかえて何処かへと連れて去っていく。

「あの町娘は安全な場所に連れて行き、身体の穢れを清め静養させます。それよりも紗綾様、今日はもうこの辺りで……」

「……そう……ね……わかりました、帰りましょう、里へ……」

「くううう……嫌ですわ……わたくしの中がおかしく……くひっ!? かつ、痒いですわつ、アソコとお尻の中が痒く……嫌つ、イヤあああああああああアああアああアああつ!」

媚薬が処女姫の膣内と腸内を無数の蚊に刺されたようにムズ痒く、そして、激しく疼かせていく。その強烈な痛みともとれる疼痒さに、岩壁へと拘束された彼女の肢体は激しく暴れ、精神力では抗う事のできない肉欲に脳が混濁していく。両胸が千切れるほど揺られて暴れる彼女の手首には、拘束した枷で擦り傷が刻まれ、薄赤い血が滲んでいる。

「いいわあ、クスクスクス……高貴なお姫様がオマ○コとお尻を媚薬で毒され、肉拷問に苛まれながら雌ブタのように身悶える淫らな姿……チュプッ……チュルチュル……」

「ひゃふっ! 胸吸わないで……おかしくなつて……ダメええええええええええつ!」

人間の限界まで過敏にされた肢体に、更に激しい肉拷問を与えるかのように華耶は姫の左峰乳を強く揉みしだき、敏感な右の乳芽を貪り、小さな処女乳にまで指先を突き挿れて動かしてきた。再び嬲られた両峰乳からは、心地いい圧迫感と共に痛痒い乳悦感までが全身を駆け巡り。初めて膣辱を受ける秘孔からは強烈な悦痒みが生まれ、背骨をくすぐりながら朦朧とする脳を突き刺してくる。

秘孔で華耶の細指が一動きする度に、小さな膣口からは吹き出すように処女蜜が溢れ、彼女の下半身を痺れさせながら両脚を女蜜まみれに変えていく。

「さあ言いなさいっ、里の場所は何処なの!」

「くあああああつ！ 言わない……言わなひいいいいいいいいいっつっ！」

精神を破壊されてしまうような肉責めに涙を頬に伝わせ、桜唇の端から唾液を零しても紗綾は里の場所を吐かない。岩壁に拘束された肢体は大量の発情汗を飛び散らしながら暴れ、紅く染まった美貌がガクガクと前後に揺れまくる。栗色の頭は何度も背後の岩壁にぶつかり、明緑のリボンで結われた長いポニーテールが左右に乱れた。

「この媚薬を胎内に塗られてもまだ理性を残していられるなんて、大したお姫様ね。仕方ないわあ、使いたくなかったけど、これで墮としてあげる……ふふ」

媚薬でも理性を残す聖姫に、肢体を齧っていた華耶は背後に背負っていた忍び刀の鞘から二本の針を取り出し、潤んだ黒い瞳に映してきた。

「……それは……？」

霞む視界でその針を見た姫は、何に使うものか解らず唾液を零す唇で訊ねた。蜘蛛が持つ針は独特の形状をしている。自分の仕込み籠手の中に忍ばせている忍び針と細さは同じだが、全長が十センチほどで、その先端が少し膨れ亀頭のような形状だ。里にあった忍びの書物でも、このような異形の針は記されてはいない。

「ふふ……素敵な忍び針でしょう、これは私が特別に作った乳辱針というものよ。効果は……そうねえ、見て貰えば解るかしら。連れて来なさい！」

二本の乳辱針を指先で弄んだ華耶は、そっと牢獄の格子の方へと視線を向け、地下牢に

居る何者かに命令を下した。すると、この地下牢にある別の牢獄部屋の重い扉が開かれる音がし、数人の者が肉拷問が行われている牢獄へと近付いてくる。

「……………ああ……………い……………もつと……………つ……………」

意識が朦朧としている為に何人か分からない。紗綾は激しく疼く肉体を震わせながら潤んだ瞳を格子の外へと向け、その姿が見える瞬間を待った。

「ひっひっひっ！ このくノ一、もう何回俺のチ○ポでイキやがったんだあ？ マ○コの中が精液でドロドロだぜ」

「ケツの孔までマ○コのように締め付けテ、さすガ淫らなくノ一だナ、ケケ……………」

現れたのは屈強な肉体を持った下鬼二体と、てんとう虫型の蟲人二体。そして彼らの中心では、黒いくノ一装束を無残にも破り裂かれ、グラマラスな肉体を晒す二十代半ばの女性が一人、その肉体を白濁液まみれにされながら全ての孔を貫かれ、歓喜に喘いでいた。

「んあああああッ！ もつと……………もつと激しく突き刺してッ！ あむッ……………チュパッチュプッ！ オ○ンコもお尻も、もつとチ○ポで掻き回してええええええええッ！」

「……………緋乃……………っ!？」

霞んだ視界に映るくノ一長の無残な姿に背筋が冷たくなり、淫欲に染まりつつある声が震える。だが緋乃は捕まっている姫くノ一に気付く事もなく、更に激しい陵辱を人外に求めて腰をくねらせ、二本のペニスを交互にしゃぶりながら、雄槍が突き刺さった二孔から

淫らな挿入音を奏でている。

「あのくノ一、かなり手強かったけど、この針を刺された途端あんな淫乱な雌犬になっちゃって。お姫様はどんな淫らな身体になるのかしら？」

楽しんで、そして残酷な笑みを見せた華耶が美少女姫の右房を鷲掴んで押さえ、鈍い光を放つ乳辱針の先端を鶉色の頂に向けてきた。

「嫌ですわっ……そんなの刺さないで、やめて……お願いやめ……」

「いいわよ……やめてあげても、その代わり里の場所を吐いて、お姫様が『わたくしのオマ○コは羅丞様のチ○ポを早くしゃぶりたくって、我慢できずにお汁をダラダラと流しています』って言って貰えるかしら」

「だっ、誰がそんな淫らな言葉など……」

「だったら、この針を乳首に刺して……ふふ……」

言うはずもない恥辱的な言葉を交換条件に、華耶は乳辱針の鋭先を肉果実に這わせ、プツクリと膨れた乳輪を辿り始めた。そのくすぐったくも恐ろしい針先に、彼女の身体は震え、心臓が直接掴まれたかのように冷たくなっていく。

「さあ、どうなの？ 羅丞様に降服した言葉を言うのか、それともあのくノ一のように肉悦に逆らえない肉体になるのか、ハッキリして頂戴！」

最悪の二択が突き付けられた。どちらを選んでも聖姫に助かる見込みはなく、肉体を城

れてしまったショックを物語るように小刻みに震え、外部に出ている針芯が篝火に照らされ鈍く光っている。

「くはっ……胸が……全身がもう……助けて……もう限界……ですわ……」

肉体と精神の限界を感じた桜唇が自然と動き、泡混じりの唾液を零しながら弱々しい言葉を洩らした。黒瞳からは涙がポロポロと溢れ、全身が堪えきれない狂疼きに痙攣して行く。

「助けて欲しければ里の場所を言いなさい、でないとな、こうしちゃうから……」

ツプッ、ツプッ、ツプッ！

「ふあああ……ひやっ、んうっ、はうっ、動かさないで……ひゃひひひひひっ！」

両胸を貫いた淫辱の針が華耶の手で動かされ、秘孔を犯す雄槍のように律動され始めた。その律動が一度行われる度に紗綾の頭には淫霧が立ち込め、今まで肉拷問に耐えていた理性が次々と破壊されていく。全身は乳辱針に神経を操られているように小刻みに震え、絶頂に達する事のできない狂いそうな焦燥感に瞳孔が開いていく。

「んふうううっ！ うっ、ひゃふっ、くうふんんっ！ かはああああああつっ！」

「さあイキたかったら言いなさいっ、言わないのならもう快樂は与えてあげないわよ！」

桜唇から悲鳴混じりの嬌声を奏で、涙を流しながら肉体を暴れさせる姫忍に、華耶は律動させていた針を放し、彼女から唯一の快樂を奪い放置した。その妖絶な貌は高貴な者を

虐げ、自分に屈服させる喜びに猟奇的な笑みを浮かべている。

「くはあああつ！ ひゃひ……ひいううううううつ！」

(言えば楽になる……、言えばこの狂おしい疼きから解放されて、気持ちよく……)

肉悦に耐える悲鳴を洩らしながら、彼女の心に肉拷問に屈する考えが過ぎり、震える桜唇が開いていく。

「里……里の場所は……ひふつ！ ぜつ、絶対に言いませんわ……」

だが美少女姫の唇から出た言葉は、華耶や羅丞が期待する言葉ではなかった。彼女は絶頂寸前で颯られ続ける、狂いそうな忍びの拷問に耐えたのだ。

「凄い……凄いわよお姫様っ！ この私の肉拷問に耐えられるなんて！ 気に入っちゃったわ、クスクスクス」

緋乃でさえ屈した拷問に耐えた紗綾の姿に、蜘蛛忍は悔しがるところか、残忍な笑みを浮かべて笑い始めた。

「でも、もう身体は限界みたい……」

拘束されたまま痙攣し続ける姫の肉体を、嘲笑うかのように口にした蜘蛛忍は、そつと岩壁に拘束していた彼女の両腕の枷を解き身体を解放した。

「うあんんん……っ！」

過酷な責め苦に力を失っていた聖姫はグニヤリと肉体を崩れさせ、そのまま前のめりに

床へと倒れていく。拘束から解放され、早く逃げ出さなければと思っけていても、もう身体を自由に動かす事ができない。

「さあお姫様、雌犬のように四つん這いになりなさいな。もつと恥ずかしい屈辱を与えてあげる」

「……はっ、……くっ……はあはあ……誰が……あなたの言う事など……」

「いいから、言う事を聞きなさいっ、この雌犬姫様っ！」

パシッ！

「あうううっ！」

屈辱的な命令を断つた姫くノ一に、華耶は家畜でも調教するかのように桃尻を叩き、悲鳴をあげさせた。

(なっ、なんでこのわたくしが……こんな姿に……)

全身の疼きに朦朧とする意識の中、彼女は屈辱を感じながらも震える両腕両脚を床に付け、命令された姿勢となり妖絶な女忍に桃尻を向けた。既に若々しくムチムチとした両脚は女蜜まみれとなり、薄紫のニーソックスは足首までその色を濃く変えている。

「あははっ！ いいわ、高貴なお姫様が私の言う通りに淫らな恰好になるなんて。お前たち、こっちに來てこの雌姫様にチ○ポを見せてやりなさいっ！」

自分の命令のままに動く処女姫を嘲笑した華耶は、格子の外で緋乃を輪姦していた下鬼

と蟲人を一体ずつ呼び寄せ、聖姫の前に立たせた。

(ああ……なんて汚いモノなの……)

潤んだ黒瞳に映る淫根に嫌悪を感じると共に、淫部に画帯のモノを擦り付けた時の快感が甦ってくる。

「お姫様どうしたの、人外のチ○ポを見て何か思い出しちゃったのかしら？」

蜘蛛忍が彼女の心を盗み見たかのような言葉を発し、その唇を姫の耳元に近付けてきた。

「人外のチ○ポは気持ちいいわよお……、オマ○コの中に入れたらあの肉幹にある瘤が襲襲に絡まって、すぐにイッチャいそうになっちゃうんだから……」

耳元で囁かれる華耶の言葉に絶頂寸前で焦らされ続けた肉体が震え、まだ受け入れた事のない膣が収縮する。理性ではそんな事を考えてはいけないと思うが、醜い淫根に処女を捧げて喘ぐ自分の姿を何度も思い浮かべてしまう。

(だっ、ダメだわこんな事を考えては……、でも……アレがあれば緋乃のように……)

肉欲を欲する意識が、人外の雄肉で狂喜するくノ一長の姿に自分の姿を重ね、掻き消せない淫らな思惑を脳裏に過ぎらせた。蜘蛛忍もそれに気付いたのだろう。不敵な笑みを浮かべながら、下鬼と蟲人に新たな命令を下す。

「さあお前たち、その汚いチ○ポを雌姫様の貌に向け、扱くのよ！」

蜘蛛忍の命令を受けた人外が、貌を淫らに歪ませて自ら雄槍を抜き始めた。緋乃を犯して

いた為、共に男女の淫液にまみれた全長十七センチほどのそれらは、射精間近だったらしく亀頭を醜く膨らまし、全体をピクピクと脈動させながら先液を垂らしている。

「里の場所を吐いたら、あの二本をしゃぶってもいいわよ」

「こんな汚いモノ……くうひふっ……わたくしは……いつ、要りませんわ……」

「そう……」

胸に挟み、素股をした時の記憶と快楽が甦る。だが口は割らない。淫辱を施す女忍もこんな事で里の場所を吐くとは思っていなかったのだろう。微笑しながら簡単に応えようと、ペニスを抜いている蟲人に手を伸ばし、全長三十センチはある細長い芋虫を受け取った。

「気持ちよくさせてあげるわあ、喘ぎ泣かせて、私の気が済むまで穢してあげる！」

高貴な者を虐げ、穢す喜びに濃青の瞳を輝かせた華耶は、纏っていたくノ一装束の胸元をおもむろに大きく開け広げ、網目状の鎖帷子に包まれた大玉スイカ並の肉果実を披露した。姫を颯って興奮した紅い頂は尖って鎖帷子の隙間から飛び出し、欲情の昂りを抑えられずにフルフルと震えている。

「ふふ、今すぐに犯してあげるわあ……んあああッ！」

四つん這いのまま左右に居る人外の肉槍を瞳に映し、肉体を震えさせる姫の淫姿を見ながら、華耶は女忍装束の短い裾に手を差し込み、両腰部で縛っていた鋭角なショーツの紐を解き、紅い下着を床へと落とした。下着を脱いだ彼女の手は、そのまま柘榴ざくろのような色

をした自分の淫唇を指先で割り広げ、濡れた淫声をあげながら、蟲人から受け取った芋虫を自分の秘孔に半分ほど刺し込んでいく。

「うっ、んふっ……聞こえている？ お姫様、この蟲は男のチ○ポのように挿入した快楽を与えてくれる蟲なのよ……ふふ、しかもちゃんと射精までできちゃう」

蟲を秘孔に刺し込み、まるでペニスを生やしたような姿になった女忍は、蟲ペニスの説明をしながら紗綾のお尻にかかっていたくノ一装束の後部を捲り上げ、桃尻を左右に押し広げながら、芋虫ペニスのもう一方の切っ先を薄赤い窄みに突き付けた。

「はう……くっ……んひいいっ!? そこ違う……違いますのに……くうっ！」
「ふふふっ、蟲に射精されるのを恐れているの？ 大丈夫よ、この蟲の精液は人間では受精できないモノだから、でもお尻に挿れるのだから関係ないけれどね」

楽しげに、声を昂ぶらせながら華耶が話しかけてきた。姫の桃尻では、体内を求めて動く蟲ペニスが尻孔の淵をモゾモゾと辿り舐め、奇声をあげたくなるような屈辱的な痒みを肉体に刻み込んでくる。

「くうああっ……うう……はんっ！」

片方の切っ先を尻孔に突き付けた蟲根が動く度に、姫の唇から恐怖と期待の入り混じった声が洩れる。桃尻の谷間で小さな肉輪を蟲ペニスで辿られる蠱悦感に、背筋はくすぐりたくも背徳的な肉の疼きに震えてしまい、見ている陵辱者を楽しませてしまう。



「クスクスクス……、可愛いわあ、お姫様……お尻のくすぐったさにもう耐えられないのね。挿入^{いれ}てあげる……、お姫様のお尻を犯してオマ○コのようにしてあげるわ！」

「いつ、嫌ですわそんなの……、ふうあ……わたくしの身体をこれ以上……っ!?」

ニュチュ……ズニュズズニュウウウウウウウウウウウッ!

「うあああつ! 挿入^{はい}つて……わたくしのお尻に穢らわしいモノが……痛っ! 痛ああああああああああ——っ! っ!」

拒む言葉も無視され、尻孔の皺が限界まで引き伸ばされて直腸が貫かれ、ポコポコとした芋虫淫根が蛇腹状の腸内を突き広げていく。ゴム塊のような柔硬い芋虫ペニスとはいえ、初めての挿入に美少女姫の身体には裂けてしまいそうな激痛が趨り、息苦しさを伴いながら肉体を虐げてくる。

「んあつはあああああああッ! いいわッ、雌姫様のお尻っ、キュウキュウと蟲のチ○ポを締め付けて、はんんっ! すぐに射精しちゃいそうよッ!」

ニュプッ、ズニュッ、ズプッ、ズニュジュジュッ!

「はあんんんんっ! 動かないで……お尻が壊れ……あぐッ! あぐうううっ!」

蟲から伝わってくる挿入の快楽に華耶は濡れた嬌声で叫び、腰を激しく前後に動かし始めた。処女姫の尻孔は淫らに歪まされながら異質な挿入音を奏で、腸内深くに蟲ペニスが突き刺さる度に、乳辱針で貫かれた美峰乳が大きく揺れ、桜唇から痛みに耐える悲鳴しか

質よ。でも、お尻をもっと激しく突いて欲しかったら、里の場所を吐きなさい……」

快楽を感じ始めた姫忍の姿に、緋乃は突然腰の動きを止めて問い質してきた。尻内の肉悦を欲した姫が桃尻を動かそうとするが、蜘蛛忍の手が腰を掴んで動かす事ができず、彼女は再び肉拷問に苛まれてしまった。

「くはあううううっ！ 里の場所は……言わない……言わないいいいいいっ！」

「こんなに肉拷問したのに吐かない人間なんて、初めてだわ」

肢体を痙攣させ、涙で頬を濡らし唇の端から唾液を零しているにも拘わらず、口を割らない姫忍の姿に華耶は感服した。だがその妖絶な美貌に諦めの色はない。

「仕方ないわね、羅丞様、百合葉をお借りするわ。雌姫様も立つのよ……ほらっ！」

「くうあんっ!? あう……」

羅丞の傍で肌を寄せていた長い黒髪の美女を呼び寄せた青髪のくノ一は、おもむろに乳辱針が突き刺さった紗綾の胸を後ろから鷲掴み、立ち上がらせた。

「お姫様の義姉上にも手伝って貰いましょうか」

「紗綾……気持ちよくしてあげるわ……」

淫蕩な声を発した百合葉は、聖姫の黒瞳の前で淫部のみが隠れる極小の紐ショーツを脱ぎ捨て、姫よりも一回り小さい両胸を晒しながら近寄ってくる。

「やめ……て……義姉様……お願い……やめ……ひゃんんんんっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>